

# 学園闘争論の

# 構築に向けて

< 共産主義者同盟政治局機関紙『旗』掲載論文より >

序文「立命大闘争と学園闘争論」	社会主義学生同盟立命大支部	
(上)「学園闘争の戦略的位置と闘争一組織戦術、統一戦線」	社会主義学生同盟全国委員会	1
(中)「東大闘争の革命的発展と同盟政治理論の再検討」	社会主義学生同盟東大支部	
「コンミュニシヤン的団結と反帝統一戦線 東大闘争の運動組織論的検討」	社会主義学生同盟東大支部	6
(下)「全人民的団結の主体的根拠 革マル主義への破産宣告」	社会主義学生同盟全国委員会	11
「全国学園共闘＝ソビエト運動 学園一地域占拠の全人民的発展の道」	社会主義学生同盟全国委員会	16

69' 2/

社会主義学生同盟-立命大支部

# 序文 「立命大闘争と学園闘争論」

社団法人主義我学学生同盟立命支部

はじめに

立命大闘争の行状と  
理論的考察

ここに提出する諸論文は「学園闘争論」の欄  
 裏に附けて出と題して其の主義者同盟行状紙  
 号戦闘に連載されたものである(第一五九  
 号一六四号、但し一六二号を除く)。我が同  
 盟の「学園闘争論」に關する理論的諸問題が  
 主として提起されたのは中大學費斗争の總  
 括を中心にして「理論戦線」七号掲載の「教  
 育学園斗争論」であろう。しなしてここに提出  
 された理論上の内容は(1)近代行半、慶応、早  
 稲田、明治、中央と続いた學費値上反対斗争  
 (2)一般の學内改善反対斗争(3)個別改良斗争  
 の延長上のものでして位置づけられるであろ  
 う。(4)中大學費斗争は8年工二又ラ斗争に  
 おいて進んだれた學費斗争(5)個別学園斗争(6)  
 と反対斗争(7)全人的斗争(8)の統合という斗  
 争形態における新在野の獲得に見られるよ  
 うにこれ以後の學内斗争(中大、日大等)の  
 理論的思想的源泉は出発点となるものであ  
 る。東大、日大斗争と全日學内斗争の爆發的  
 高揚は従来の「學内斗争論」の根本的再検討  
 を必要とし、それに伴って一切の革命的諸党  
 派の力量が向かわれることとなるのである。  
 特に東大斗争は、15-18、14斗争を最終的  
 高揚局面として革命的諸党派、なるんが我  
 り同盟の政治理論、運動組織論上にわたる再  
 検討の総括を提出せざるにや、この「學  
 内斗争論」の理論的探化を購取するものとして  
 あつた。そして東大、日大、中大の三大学を  
 中心とした東京學内斗争のボック発は全日闘  
 争として斗われて行く學内斗争の中心として  
 あつたのである。それはまた前記の焦点を形  
 成したものである。それを中心とした東西  
 學内斗争があり、その口火をのり最先頭に立  
 つて斗われた内中一つが立命大斗争である。  
 西園寺斗争は東大斗争、東京學内斗争で示  
 された理論的探化を継ぎ、堅持し、更なる探  
 化、発展を購取するものとしてなければならぬ  
 の。我々同盟支部は立命大斗争の理論的指導  
 としてその責任を負つて責任を確保してきたし、  
 一貫してその責任を担つて行つて来つたであらう。

立命大斗争は寮斗争から出發したのだが、  
 それは他の1月以降始まつた學内斗争と同様  
 に、東大斗争の倒産した地点から出發したこ  
 とをまず確認しなければならぬ。しなして立  
 命大斗争の高揚の夏は昨年12月、日其日民  
 青の學内新聞社破産に對する抗議斗争、いわ  
 るる「新聞社向懸」に求められれば足りぬ  
 であらう。この立命大斗争の特徴は、オーに  
 大學運営に關する學生参加方式(2)連帯校務  
 方式(3)學費校務、學費總等(4)を粉砕する斗  
 争である。即ち「立命館民主主義」を標榜してゆく  
 斗争である。その意味より言つて他の學生参  
 加を主眼とする「民主化」の學内斗争を  
 も超越した質的に高い斗争であること、オニ  
 に日其日民青の全日大學の最大拠点の一つに  
 ある立命館と言わなければならない。日其日民  
 青の學内支配の完成(教授会、教授組、生員、  
 學生自治会等の組織)を粉砕してゆく斗争、  
 それ以前に日其日民青の対峙となつて  
 ることをいふことである。また主幹的条  
 件より言へば、立命館は空想的諸党派(4ト  
 ロ、善解を除いた)を存在して口をこ、そ  
 して民青の主体的勢力に比べて、反代々木諸  
 党派、ゆかんが革命的諸党派の勢力を極めて  
 小さいこと、そのことからの反代々木ノンセク  
 トラジカルが膨大に存在して居ることである。  
 このような中において、立命大斗争は「立  
 命館民主主義」を標榜して、後期試験、入試実  
 行を阻止した全日斗争(1)後期試験、入試実  
 行阻止(2)特別隊導入と続く事案の中で各党派  
 斗争に斗われてきた。しなしてその過程で我々  
 同盟を中心とした革命的左派とフロント、陣  
 マル、一部のノンセクトラジカルを中心とし  
 た學内民主主義、改革主義者との激突は學内斗  
 争が展開されてきたのである。しなしてそれ  
 無しに不毛であり、理論的未成熟を示すもの  
 としてあつた。至其斗争の理論的不充分  
 性を早急に克服し、立命大斗争の革命的発展  
 として學内斗争論の更なる理論的探化を確保  
 する必要があるであらう。この小パンフレットの  
 ための一冊とすれば幸いである。(この稿未完)



治、国内政治—国家権力の動向と革命党派の階級政治という国家的な「階級関係」の把握として確立して行くことである。

その故、中流の如く「革命までバロケードを解かない」という願望や決意によって、闘争は指導はできない。既にいくつかの大学では、学面全面封鎖—資本制分業生産のまじを逼り、運動は全学生—学内全階級—地味任氏—受難性—を促した大学に諸利害を関係しあう部分—と、形—運動がますます広がりを持ち影響を及ぼすに至っている。

この戦術を要領すればよいというわけではない。昨大学、青学大では、運動の成否とは無関係に、極めて戦術的に運動の方針を当初は提起した。「本館占拠」という異名に、たゞそれは、中流右派の圧制を頭、左派の孤立として、両者とと、一日にしてバロケード解除、そこから逃亡を余儀なくされたのである。医科歯科大学ですら、又、頃—さら外来封鎖の實現に至るまで實現に至るまで更に五ヶ月という期間が必要であった。

日本帝國主義の展開する侵略—反革命—抑圧政策の統一の把握、そして抑圧、とりわけ大学における再編の内容を緻密に分析、検討すること。その場合「階級関係」の反映として、学内諸階級の経済的利害の反映—テオロギーを的確に把握し、それは、その大学における過去の運動の蓄積、運動の成熟度—左派の学内でのヘゲモニー—実体の現状と条件と—を検討に加えて把握せねばならない。

資本制分業生産の部分的マニを学内バロケードとして獲ちとること。その際の学内バリは、外に何かの質を、すなわち政治斗争に統合せられるべき質を持たなければならぬこと。だが、フロレタリアは未成熟であり、生産力状況が劇出でさがるまで到達してないから、政治斗争は、バカ斗争—としての性格は—をもちあらず、学内斗争は政治斗争に統合し尽されないうまま、カンテイカ—の政治傾向を不断に帯びて行くのであり、政治斗争と経済斗争の結行—は常に実践的

には實現されぬまま、へ理論と実践の対立として矛盾をばらみつつ、絶えずの上場を求めて学内斗争は斗かわれていかなければならぬのだ。

### 革命的敗北主義の内実 階級形成—の根本問題

（中）中大学費斗争の最終局面において向われたい革命的敗北主義—の評價とそれの實踐的適用の問題である。この問題の中心は、個別斗争それ自体の論理的明確化と、その限界性の中で向われくる。個別斗争の政治斗争への飛躍の内容である。これは諸学内斗争から生み出す、カンテイカ—と、無政府主義等との区別する、明確な敗北であり、斗争の早急面—常に向われくる問題である。

国家—市民—社会—個人—の統一的把握が、この分析にとつて重要である。何故なら、資本制分業生産様式に基づいて、「物質的交連の全体を把握」する市民社会地、行動が共同体としての国家を生みだすのであり、市民社会の一領域としての大学社会は、それ自体が—社会から相対的に分離したものととして把握し、水くはならぬからである。帝國主義的再編の内容とは物質的交連の再編の内容のことであり、革マル派が「現実の大学は、模範上—は大学の自治、学内の自治—教授による自主規制、学内研究の自由加存在し、国家機構と断絶しており—」という時、彼等のイデオロギ—が如何に頭の中を造りあげたものでしかないことはもはや自明の理である。こうした問題の組み立て方を放棄した時に、学内主義—無政府主義、経済主義が生みだされ、斗争は發展の内容を持たない固定化されたものとなる。

大学は、一つには、労働力商品再生産機構としての位置を有し、もう一つには、ブルジョアイデオロギーの再生産機構としての位置を有している。この大学が、国家、独占資本から相対的独立性を有するようになり、それは如何の理由による。「資本家階級が社会的分業を發展させ、より高度な生産性を獲得するため技術労働者、

即ち制年価値の産出者として養成する必然性  
からしてあり、「分業の所産が仮象の自由を  
成立させる」ところから展開させる宗教—芸術  
—知識の自立の形態を教育として社会的に組  
織化することによって物力の商品の生産を引  
きつづけるのである。……教育の社会的組織  
の機構が独自に存在するように見之るのは  
尙早—研究を以て自身が自由に見之るものか  
ら形態を通じて支配階級の利益を貫徹してい  
るのである。

われわれは個別競争斗争を専ら場面の獲得  
目標を (A)多量の共産主義者の産出 (B)兵力  
奥態—ハゲモニーを市民—会内部に構築す  
ること—と確定する。この場合大衆運動の  
勝利そのもの—改良の獲得として語られるべ  
きではなく、改良の獲得それ自体は、まして  
肉體の根本となるものを解決したわけではな  
く、この矛盾はまた同じようなあるいは変容  
した形態をもつ問題として発現すること、従  
つて、アロ—リマ政治革命まで、諸階級は  
絶えず敗北し続けようこと、これを確認せねば  
ならない。遂に之は、大衆運動の敗北は階  
級斗争の後退を意味するわけでは決してない  
ということである。だが、大衆は大衆運動の  
方針を媒介にして斗いに結集しているのでは  
あるから、まさに覚醒が戦路を如何に大衆運動  
上のスロー—カンに表現するの、斗争主体の  
相互の結局の内容を何とメル—ルとして  
要するの、このことが重要である。

**反帝斗争の一環として  
戦術の限界とその止揚**

従つて運動過程において何を主要な問題  
とせねばならないのであろうか。明きらかに  
大衆運動上の方針であり、斗争戦術である。  
われわれは階級斗争の発展を対峙し自己変革  
の斗争の過程にもとめるから、イデオロギ—  
のみをこのこんでもだめであり、又、「運動  
かまへて」であつてもたぬである。

「一時的に」つて一つの個別斗争において  
は、大衆—一般は、その個別闘争における改良  
の果實—を目的として斗争に決起してくる。  
何故ならは彼等がもしと即目的アロ—タリ  
であるならば、彼等自身、質的階級者である

いう物質的諸関係の同一性を保持つてあり、そ  
の限りにおいて、直接諸要求の同一性をもち  
ているからである。へ理論戦線七思—これは  
学生の場合も同様のことかいはる。そして「  
その斗争の勝利をあくまでも追求して」この  
とあるならば、要するに「斗争戦術」はま  
すますレベルアップをこれといふかばはならず  
大衆—そのもの、一般の改良斗争のため  
だけではない事柄が發生してくるの  
である。すなわちその時大衆は、可自分がそ  
うしてまで斗争することの意義—をこの意識  
内部で対立しているのであり、そこでは、斗  
うことの必然性—革命的階級による論理と  
して与えられねばならないのである。この  
確認はすまに行つてきたらう。

即ち大衆を階級として高めていく場合、  
大衆運動の方針—斗争戦術と政治主張との連  
肉の中で行なつていくのであるが、われわれ  
は、従来、「政治斗争への階級」を主張する  
あまり、大衆の改良の要求を政治主義的に切  
る傾向があり、全大衆に対する勾引力がな  
いままに、革命的左派の孤立として結果するの  
はよく見られることである。経済主義の他方  
の極にある政治主義、これを止揚せねばなら  
ない。

大衆が成長していく過程の内面的契機を、  
共産主義の内容の系統的提起へ全面的政治暴  
露—と大衆運動の局面刷新—運動方針の關係  
の中に求めなければならぬ。日大斗争は、  
6月段階で、右翼との衝突の際、向にはいつ  
た戦術的「味方」として血をいれ、技能が  
ら、9月に、戦術隊との階級階級により戦術  
隊員に死者が出るに至るといふ、この「変化  
一つでどうしてみても、明きらかに運動は質的  
発展をこけていたらう。こころさせた契機は  
何であつたのだろうか。戦術隊は、明きらか  
に、彼らにとつて不疎遠—な、なれらから  
独立したもの、「それ自身、ふたたび特殊な  
、独自の普遍—と利害を構築するために、  
自衛的斗争に対する「実践的介入と制御」を  
担うものでしかない」といふことに、大衆は、  
へ「階級内閣—古旧体制」の中に見出し、気  
付きはじめたからである。

肉體の原則的契機とそれの質的展開と

は必ずしも一致しない。諸制約を扱  
きし、その長所を押し付けは、勿論的であり得  
る。これは既述大衆闘争の総括、東  
大衆闘争の総括として明らかになら  
るべき内容である。

そして、斗争戦術は、当局に對するカレッ  
シヤーであると同時に、大衆の帝國主義的  
再編反對への資本制分業生産の部分的マヒ  
といった意識性として具體的に表現するよう  
なものである。實現されるべきではない。階級形  
成とは意識形成とは異なる。大衆を總体とし  
て高めていくこと、権力自体を大衆内部に轉  
率し拡大していくこと、これではなれない。  
ない。これらと計劃する具體的メルクマール  
は「斗争戦術」への結集の量と、彼へ意志一  
致の内容である。更にこの斗争戦術は固定  
化されてはならない。ふとんにその意味を向  
い、その限界を明らかにし、運動は發展さ  
せられなければならない。

### 大衆の分解と新たな 團結形態—統一戦線

(一)組織戦術 個別斗争に於ける組織戦術の  
問題は、「理論戦線七号」日向論文における  
へ即目的プロレタリアの組織化の論理で基  
本的な点で一定程度明らかになされ、かつ鈴  
木説々、中大学費斗争においてわれわれは  
何を主張したか、その奥義的課題は何かと  
いうことを明らかにしてきざらう。

勿論、合法的形態をもちたへ大衆斗争機関  
が当初は大衆の前面に登場する斗争組織  
實體として存在しているとして、運動の非  
互補性へ長期性、暴力性により自らの日興  
利害と大衆社会の共同利害の対立、あるいは  
階級利害と市民社会の共同利害の対立、統一  
させていこうとする大衆は、運動の發展によ  
つて、ますます分解していかざるを得ない。  
ここに新たな團結の内容と、それを保障する  
形態が具體的に確定されねばならない。

ここに提起するわれわれの組織方針は、「コ  
ミュニズム」の大衆戦術組織ソヴ、エト理論學  
評である。

これは統一戦線機関として形成されていか

なければならぬ。二つうことな問題の要であ  
り、革命時における、ソビエトへと高められ  
ていくべきものである。従つてこれは、様々  
な党派、あるいはクルースの大衆運動の方  
針を扱つて大衆を結集してくる過程に於い  
て、何が同盟が、その方針、斗争戦術を媒介  
にして他党派との戦術斗争を全面的に（共產  
主義の全内容に至るまで）統一し、他党派  
解体を促進し、何が同盟の下に広げられ、  
吸引して「計画」としての戦術上の貢献してい  
くものでなければならぬ。

二の確認点を踏まえて、斗争戦術の要  
論として打ち出された如く四長である。  
(一)学園斗争の国際的社会的連帯。侵略反革命  
反對斗争と陣地前哨斗争を結びさせ、全面的  
政治裏面を通じて、学園から広範な政治斗争  
部隊を街頭に輩出させること。

(二)全人民の武装の促進、武装行隊の建設。大  
衆的諸組織に於いて「武装行隊隊」に結集しよ  
う。「全員がハルメットをかぶり、棍棒を  
持とう」「コミューン的大衆組織をつくらう」  
「コミューン的屋宇評を建設しよう」など  
のスローガンを採用し、深く革命戦のスロー  
ガンを根づかせること。大衆的戦術組織は、  
完全に分離された武装行隊隊、全権成員の軍  
事組織化の義務を以つて、尚、大衆、反  
び同盟との斗争を遂行しつづ、全大衆人の  
武装。「権力、資本は武装解除せよ」と自ら  
のスローガンをせねばならない。

(三)諸行動委、諸団体の統合と再編成の要  
半数による「ゴール、人民裁判、階級裁判」  
大衆の高次の自発性性とプロレタリア建設に  
向かう目的意識性は、自然発生的な政治  
的結合形態として存在していた党内の種々の  
合法的團結形態を解体し、半合法的、非合法的の  
團結形態を、自らの意識と行動の中心とした規  
範として再編するが故に、党内の諸団体は一  
時的に解散し、大衆的戦術組織に統合され  
ねばならない。これらの民主主義は、改悪

主義、経済主義、サンニイカリズム、テロリ  
ズムに對する徹底した人民裁判と階級裁判の  
うえに直の民主主義に向けて確立されねばな  
らない。

① 執行、行政、司法を統制する斗争機関。

「自由の陣営」に留まるブルジョア立法権能のこのところをばなす、その自由の具体的保障となる機能を、またサンニカリスト、テロリストの共同斗争破壊に對しての人民裁判を行なう機能を呈し一つにしたものとして、大衆的戦斗組織は建設されねばならない。

この組織を組織戦術として打ちだしつつ、共産同一社党同一はこの中でたゞの指導的役割を果たさなければならぬ。国営陣は統一戦線機関であるのだから、行動上の統一を破壊しない徹底した内部イデオロギー斗争を保障し、その政治方針をめぐるへ共産同一社党同一の多数派工作として斗われたいかぬばならない。われわれは現存的には、統一戦線の対象を中核派、青銅左派、四卜口、M.L.派、樞密最左派、社党同までを含んだものとして考へる。

総括すべし向是は「ニニ至学封鎖斗争に於いて全面的に登場した。ニニニ至学封鎖失敗の持つ意味は我々に何が不足し、何を教訓化し、何を改善すべきなのかを明らかにさせた。至学封鎖を最後まで追求したかなしえなかつた我が同盟にとって、革マル・フロントの「主体的力量がなかつた」という一般論によって自らの理論的破滅の隠パイヤ「革マルが日和。下」ことを弾劾し自らを正当化することの主体的総括抜きに自らを正当化する解放派諸君らのためとは、まさに彼らが大斗争主流派としての資格がないことの自づからでしかなく、我々にその座をどうてかわられぬはならないことを確認するものであり、我々の全面的な総括を提出する事を通してはしとげられぬはならない向是である。

それは「一に個別東大斗争を全人民的斗争へと発展させてゆく政策の向是であり、二には、それが如何なる運動組織をもって担われていくのかという、斗争技術・至共斗・コミニュニオン型組織の向是であり、三には、それを指し示す社党同・フロントの組織的総括即ち、ケルン作りと統一戦線戦術である。

**政治内容上の総括**

(1) 我々は、大衆に共共主義を意図的に実践させねばならない、というのは階級社会の最も完成されたものが「資本主義」社会であり資本制生産関係における「生産力と生産関係の矛盾」「生産の社会制と私的所有」は「生産力ではなくて破壊力へ特殊装置と貨幣でしかない生産力と交通手段」をせしめ、争もまたその一つである、これは究極的には共共主義革命による、それは究極的にあり方に狙いをつけ、やむを得ず一掃し、あらゆる階級の意識を、階級そのものといふし、に廃棄するし、となしには解決されない、と同時に「打倒する階級が、革命においては何の、すべての身の汚れをぬぐいおとして、社会のあららしい基礎をつくるを身につける所へ進しうるからこそ必要なのである」即ち東大斗争という個別改良斗争に資本主義が廃絶し、このものが死滅しおいかぎり根

本的には解決され、その為の共共主義革命は資本主義の生み出すコロレタリア階級によって可能となり、東大生はかかるコロレタリア階級との結合に共共主義運動を通じてのみ東大斗争を止揚しうる。

共共主義運動とは何か。それは共共主義を理論的に学ぶと同時に絶えず理論を現実に適応し、個別斗争を共共主義革命に高めてゆくことであり、永続革命でなければならぬ。

従ってその理論は一般的に共共主義のお話によってあるべき共共主義的人間を作るのではなく、資本主義の泉理の、階級的把握と革命論の構築を基礎に現代過渡期世界の解明と世界に一回同時革命へ向け下占めと行の個別東大斗争における任務としてなければならぬ。東大斗争の置かれた帝国内社会における位置とコロレタリア統一戦線・党への展望を大衆に身元コミニュニオンの団結を打ちつけてゆかねばならないのである。

我々は、以上の東大斗争を闘う共共主義者の視点をふまえ次のような政治内容を与えたい。

**東大斗争の全人民的債**

日本帝国内では、七〇年安保にみられた、保共反革命同盟の強化とアジアにおける軍事のハカモノの拡大を沖繩基地の掌握・自衛隊の海外派兵・核の有事持込みとして行い、それにかあつた国防力の強化、右派対策の警察力の増大等暴力装置の再編を行っている。

これらは、反戦斗争・社会主義斗争・社会政治斗争を生みだしてあり、そうして諸階級諸地域における個別斗争が切りはなされるのではなく固く結合し統一されねばならない事を示している。

在日学闘斗争における教育斗争は様々な性格をとりつてゐるが、それらは日米の対外膨張にかあつた二内の再編の一環に対する斗争としてとらえる必要がある。共業界と大学の結合の緊密化、国際競争戦をかりぬく企業の強化を中、高級管理者、技術者の育成、研究内容技術の提供として大学を要請し、設備投資による学費値上げ、全人格的人間教育の喪失として諸矛盾を形成している。軍学協同といわれぬものも七〇年安保をいならえ侵略と反



革命治安行動の軍事部内の強化が米軍資金專入・ロケット研究等技術提供を中心に行われ  
ている。官学協同も又、ナショナルリズムを中  
心にしたイデオロギイを生産、都市工等による  
都市対策（治安上策）、官僚の生産、口大協  
による大官支配等と行われ、六五年慶大斗争  
、六六年早大斗争、六七年明大、南学、中大  
、法大斗争、六八年東大、駒大、東  
大、日大斗争と全口の大学に於いて一挙的に  
矛盾が露呈しており、フランスに於けるカル  
チエラマン斗争のように、大衆が意欲すると  
否にかかわらず、全学バリケードかつ帝  
土に対する闘争へと成熟の方向性を有しつつあ  
り、完全に社会問題化或いは政治問題化して  
いる。「入試をしない」「廃校だ」等の政府  
の危機感の表れ、また東大を象牙の塔とし  
て自由な教育、学内、技術の研究の場とし  
て位置付けるころ々、その自由が仮象  
の自由であり、大学がブルジョア生産様式の  
一環に過ぎないことを示して  
いる。

東大斗争もそのような全口学闘斗争の一つで  
あり、日帝の大学支配の中枢として天王山の  
な意味を帯びている。医学部斗争は医学生の  
あふれた封建的な村社要素と結合した帝国土  
主主義的斗争である。再編、合理化に対決する  
闘いとしてオニカ石の斗争が斗われつつも他  
階層との結合のなしえぬまま処分による当局  
のきりくずしによる闘いの困難性に対し、時  
計台占拠と村社派導と斗争の全学化という  
ようにして学闘と社会闘争を切りつつ斗争  
は発展して行く。たゞ、全学斗争の学友は、「  
大学の自治」を口実として、医学生にとって  
は理論のみならず運動組織面に於いても個別  
医学部の問題としてはとらえきれぬ質的転換  
を問題に悩んでいたのである。ブルジョアジ  
イは大学の支配を如何に行ってきたのか。口  
大斗争の経緯、一歩一歩の歩路線によつて  
大学支配を管轄してきた。それは大学の自治  
とは教授会の自治である、という言葉にも明  
らかなように教授会に学内の決定権を与え、  
文部省の直接支配でなく、自主に規制させる  
というものであり、大学共同体という幻想の

枠の中で個別矛盾を解決せんとするものであ  
る。その裏、予算権、文部官僚の送り込み等  
を通じて教授会、口大協を支配している政府又  
却省はみかめる分業に立脚した共同幻想で大学  
支配をより有効に緻密に行っている。日共の  
諸君はこれを理解できず自治という仮象に依  
拠し「自治擁護」という東大幻想共同体の  
枠の中で問題を設定することから共同幻想を  
突破しきれず、民族民主統一戦線なる国家権  
力打倒（プロレタリア国際主義として共同幻  
想を突破）の闘いへ彼らに於いては米日反動  
に對決する闘いへ個別斗争と村社的にしな  
結合されず接木になつてしまつたのである。だ  
から結合の要は、民主的否か否かという言葉  
の問題となり、帝国土の政治経済相対との  
関係で統一的に把握されないのだ。

以上の個別東大斗争をめぐる帝国土主義社会  
の有村的連関性を捉えるなら、東大斗争は日  
帝打倒の陣地として斗われなければならない  
闘い、反戦斗争を始めとする全人民的政治斗争  
を東大生は東大斗争と等質性をもつて斗われ  
るはずであり、みかめる個別斗争と全人民政治  
斗争、経済斗争と政治斗争を結合する、権  
力斗争を闘い技巧プロレタリア統一戦線の準  
備がなされるはずである。我々は今みかめる任  
務をもつた集団を全学連、反戦青年会、政  
向統一戦線に当面結集させ地区ソヴイエトの  
萌芽を建設しなければならぬ。あらゆる  
サンジカリズム、改良主義を批判し、革命党  
を強固に形成せねばならない。正にその為  
に、共産主義者は闘うのである。  
我々は簡単ではあるが以上のような政治内  
容のもとに東大斗争を位置付け指導してきた  
。だが一体どのような指導致を管轄したの  
か。それは何故なのか。現実の組織過程をふ  
まえつつ明らかにしなければならぬ。我々  
は以上の政治内容を東大斗争の当初より明ら  
かにしてきたがそれは部分的でしなく、二  
・三図書館封鎖失敗の統括をふまえ医武裝行  
動隊建設の過程でハラスローカンを出し医  
共闘の質的飛躍を計つていたのである。

# 八つの戦略スローガン

一 NATO・安保粉砕！ベトナム革命勝利！

二 日帝の侵略・反革命！70年安保粉砕！

三 日帝の中枢官僚養成材廠・日大協総本山！  
東京帝国大学を打倒し人民大学に改編せよ

四 全日学闘争を70年安保斗争への飛躍の場とせよ！

五 コミュニズム原則の下、鉄の人民的団結！  
大衆的戦闘組織と武装行動隊を創出せよ！

六 全学共闘会議を諸階級統合の環！ソブイエ  
型！全学評として再編し、全学連・地区反

戦の反帝統一戦線の強化を克ち取ろう！

七 全ゆる改良主義・経済主義・組合主義・日  
和見主義・無政府主義を粉砕せよ！

八 全東大人は全共闘に結集し、七項目要求を  
八大スローガンの下に闘い抜け！

この八大スローガンの提出された意味は大きく、あらゆる改良主義者は「上から下から」などと言争を避けていたのであるが、我々の執拗な追求は彼らにスローガンを提出させ、戦闘的内容へと医共闘に結集する先進的学友の論争を高めて行ったのであった。しかし我々はこの過程でそれまでの我々の組織化が如何にサンデイカリズム的又は最大限綱領主義的、或いは戦術主義的のものであったかという事を痛苦をもって確認しなければならなかったし、それは我々に政治内容・運動組織論にわたる全面的な総括を要求してきた。だがこの八大スローガンの持つ優位性を我々は正當に評価する必要があるし、とりわけその個別斗争論者達を「革命主義だ」とか「反権力主義だ」とか泣き言を言わせた事ははっきりと確認できる。あわてて我々にくっついて来たML派などは中大斗争に於ける理論的破産の自己批判的総括もなしになし、むしろ的に修正、密輸入し二重権力の創出などと言っているが極めて一口主義的な内容でしかなく70年安保の位置付けもない覚悟性をうすめたものでしか無い。革マルの普遍本質論、戦略論、特殊実体論、組織戦術論、個別現象論、戦術論もこの三者の関係を運動論上で概

械的に分離し、個別斗争論、戦術論、個別現象論として「個別斗争には個別斗争の論理がある」ということにより、普遍本質論、戦略論を提出しえず個別斗争主義に落ち込むのである。東大斗争という個別斗争を闘う時にもその本質は帝主義に対する戦略的内容を戦略的スローガンとして、即ち日帝の政治的環、70年安保粉砕を権力打倒との関連で如何に位置付け任務を設定するのふという事から東大斗争を位置付ける事無しに個別東大斗争が語られているのであり、70年代階級斗争に於ける権力斗争を準備する地区ソブイエト、反帝統一戦線の形成や世界統一戦線の問題をぬきにして反スタ革命党の形成の問題が無媒介に述べられているのである。70年代に経済危殆や政府危殆、階級危殆が来ないと言つながら来ないことの証明でもしたまえ。政府危殆そのものを如何に作り出すのかという密観的な過程の展望の中に主体的な問題の設定のできない諸君は統一戦線の問題を提出せず、あたかも君達単独でゼネスト、革命ができるのかのごとく考えて空想社会主義になっているのではないだろうか。

(2) (1)で確認した内容を我々は大衆に与え彼らに革命的主体に高めて行かねばならない。「支配的な思想は支配者の思想である」というマルクスの言葉にもあるように、この資本主義社会で生活を営んでいる人間のあるがままの誠意はブルジョアイデオロギーである。と同時に、七項目という改良的な要求を撤して行く闘いの中で人は数多くの知識を學び、体制そのもの、その構造、その意識を保持した存在として自らを改革して行く。この転倒が如何にして可能なのか、我々は如何にかにせねばならない。確かにこの社会に於ける様々な階級の特殊利害は彼のつかれた存在様

式に規定される。即ち、自ら、商品として販売する労働者は、商品交換の過程でそのものを廃絶するならば、労働力の再生

し得ないが故に即目的には「如何に高く労働力を販売するの」という意識しか生み出し得ない。しかも賃労働と資本の關係は等価交換という仮象性を媒介として直接搾取關係を表示せず、むしろその分業關係は共同幻想を生み出し、個別資本の下に労働者の特殊利害は包摂されているのである。従つて労働者の経済斗争は個別資本に対する改良斗争として出発するのである。学生の意識も又、本質的には労働者と同じ私的的商品所有者を展望とした存在としてのブルジョアの意識であるが、その質的差異は学生に特有な内的矛盾を形成している。即ち、彼はより高度な知識・技術を学ぶことを通じて高級労働力商品として自らのエゴを貫徹せんとするわけであるが、その学向、教育は宗教、芸術のよつに觀念に於て自主的形態を有し、彼はかかる学向、教育を自然發生的にではあるが人間の解放への手段化にしようとするのである。かかる学生の内的矛盾は現在根柢的に深められ、拡大している。なぜならば、学向の自由、平和と民主主義の追求に基づく学向研究は50、60年代前半の高度成長期の日本に於ては資本主義の発展と統一されるという幻想を与えられたのである。それは戦後の政治権力が戦後憲法を自己のイデオロギーとしなければならぬような発展過程と「市民的教養人」の養成こそこの時期の大学のみならず存在の様式と質であったからであり、にもなわらず60年代後半日帝の対外膨張に基いた全社会的再編は「市民物」と教養人としての学主を部分的にしか許さず、「国家の繁栄のため、若くは他人の平和、自由、より良い生活は許される」といった利益、国防イデオロギーに武装された「戦能的技术者」の養成を要求し、あたかも真の自由な教育、研究があつて、それが奪われ、その如き様相を一戸深めていくから、その教育、研究を人類解放に役立てようといふ理念とそれをなし得ない現実の間に深く鋭い内的矛盾が形成されるのである。

したがつてそこから生み出される批判は個別階級の枠を超え社会国家に対する批判にまで高まる条件を十分持つており、正しい指導

かなざれば改良的要素も革命的実践へと発展するのである。確かに東大斗争は個別斗争であり全人民的政治斗争や生産点との結合と、いふ条件がなければ直ちに革命斗争（二権力斗争）に転化するべくも無いことは明らかである。だが個別斗争を革命的に推進するとしても、その限りでは何もなかったことにはならず、個別斗争を革命斗争と切りはなして現実とは別個の地点に革命斗争を設定するのは日和見主義となる。だからこそ我々にとつては個別斗争を斗争学友の持つ内的矛盾をいかに展開し、コンミュニクティブな団結に高め、行き、反帝統一戦線を形成することができ、否かというのが問題になる。ギギなのである。大学コンミュニクティブをつくらうとしているなどと右翼的に批判し、60年代の階級斗争におけるソヴイェト形成などを問題にもして、いな革マル派は犯罪的である。すでに東大の先進的学友諸君は学業を停止し、全共斗という既成の「コンミュニクティブ」を、視され、暴力主義者とレッテルを貼られ、社会体制を全面的に否定することを余儀なくされた戦斗的組織に結集し、そこでは7項目を生み出すこの世界そのものに対する闘いを無意識的ながら始めている。我々に向われる任務はかかる目的意識性の萌芽を發展させ、粉砕、日帝打倒の戦列に共に加わることである。だがその任務は極めて困難であり、不断のブルジョアイデオロギーとの闘いなくしてあり得ない。なぜならばブルジョアイデオロギーが社会主義的イデオロギーよりその起

源より、はかり知れないほど多くの普及手段をもっているからであり、私的的商品所有者としての生活の展望は不断に我々をブルジョアの思想におとしこめるからである。

## 七項目要求の再把握

従って我々がなすべきことは、個別学生形あるいは東大という地域的に限定された内題としてこの斗いがあるのではなく、全人民的な普遍的な全階級の問題であることを認識すると同時に、それを運動、組織として実践することであり、バリケード封鎖による学業の停止もみなる観点から位置付けることなのである。みなる指道を行うの必前在党の任務であり、これを否定する解放派は現代無政府主義に転落せざるを得ない。「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である。」ことが共産主義理論を何か労働者階級しな作れないものと錯覚し、「学生は労働力再生産過程にある」から労働者と同質の苦痛と自立によるプロレタリア統一戦線に向けての反産協の闘いなどと学生、労働者の自然発生性を賛美し指し性を放棄しているのである。彼らには「家論」共同幻想論、分業論が全く理解できないがゆえに「国家権力を何かブルジョアジーの恣意的なもの」と機能論的に把握し、「政治革命は社会革命に先行することを忘却し、現実には社会的権力の樹立しか考えない、反合理化、反産協同路線主義者」という空想的社会主義者になっているのである。

我々は七項目という個別改良課題をもってハ大スローガンという戦略的スローガンに高めて行くことを追求し、大衆自身にハ大スローガンを自らのスローガンとして与えて行くことを追求して来た。だがそれは個別改良課題と戦略的課題との接木、即ち七項目要求とハ大スローガンの有機的結合であって、はならなかった。にもみならず二、三の三の医共斗内部に於る論争は「戦略的スローガンは一般的には必要」という形しか進行せず又学部にはみなる内容討論すら行われず、教授会に対するプレッシャーとしての全学封鎖でしかないという状況は我々にハ大スローガンの更なる緻密化を要求しており、それは学内諸階級に対する政策を提出されなければならぬことを示していた。

その政策とは、①七項目を更に押し広げ学

内諸階級の諸生産活動を包摂し対象化し、その内在的諸矛盾を深化させるものとして帝国内主義との非和解性を形成し、②その矛盾に方向性を与える。即ちハ大スローガンへと発展して行く内容を持ったものであり、③にもみならず我が同盟が以前持っていた「生活と権利の實力防衛」という改良的スローガンの徹底化による改良斗争の限界、革命的意識の形成という政治力学主義的のものではなく、④同じく革マル派の如きハ大スローガンという党派の戦略的スローガンを提示せずして「大協」自主規制粉砕」というスローガンを七項目に上積みし、組織力でそれを技術的におぎなうのみであって、はならないし、⑤運動の発展過程をふまえて「大協、医療再編合理化を中心的な課題としてゆくことは勿論であるし、⑥それをクラスに持ち込んでクラス決議を高めて行く、総じて大衆の自然発生性を戦略的スローガンに導いて行くという過渡的スローガンがハ大スローガンの緻密化、政策という形で求められなければならない。それは学生、院生、職員が生産、生活諸活動が日帝の新たな発展コース、アジア侵略、反革命に担っている役割りを暴露するであろう。すでにその萌芽は都市工、人類学研究、ロケット研究で明らかになりつつあり、産学協同、官学協同の大学の帝国内主義的再編総体に対する鋭い批判として追求されて行くであろう。更にそれは民青の如く諸要求と民主化運動として民族民主統一戦線という体制内ブルジョアの改良、組合主義的政治へと展開されてはならず、コンミニューナ的な団結と安粉砕、日帝打倒の反帝統一戦線に諸階級を結集させるものとなるであろう。全学連、地区反戦青年委との結合は学内に於ても具体化されねばならないし現実的には教育学闘争勝利、全学連、反戦という進展をふまえ、神田地区共斗の結成等を具体化したことになる。

# (B)政治指導上の総括

(A)を明さらした政治内容並に政策は一般的に宣伝されるのみでは決して組織化しえない。それはまさに改良の単興を求めた大衆との隔りありにおける戦術の駆使による政治過程の進展によつて学生大衆が政治的に自己を位置づけざるをえずることによつてより有効に組織化されることを我々は幾度びかの政治的経験で知つてゐる。六〇年安保しかり、一〇・八月田斗争以後の反戦斗争しかりである。我々は支配様式暴力的側面を見抜きつつ、それを引きだす事を通じて東大斗争を作りあげたが、それ以後の政治過程をけん引できなかった要因を政治内容の緻密化あるいは組織戦術の不十分性に求めるのみならず我々の斗争戦術が国家論へ共同幻想論の一面的理解に基づいていた結果としてある事としてそれは斗争戦術を極めて固定化・奇型化してしまつて現出せしめたことを自己批判的に総括せねばならぬ。

(1)東大共同社会に於いては、世間一般、市民社会と同じやうに、分業に包摂された諸個人が特殊利害を追求してこのがっかりあいをしているのが実状である。にもかかわらずそこに生活する諸個人は東大個別国家資本に属する種々の分業関係を形成することによつて市民社会とは区別された「東大」という幻想共同性を生みだす。それはちよつと「国家」という幻想の共同性が分業に基づき私的所有に基礎を置くのと同じである。

労働者と資本の対立は、特殊利害と共同利益の分裂をあらわしているが、労働者は資本を前提とし、資本は労働者を前提とするというやうに分業関係によつて幻想的な共同利益を生み出すのであり、その自立した者として国家の政治的共同体を生み出すのであるが、大学という共同社会の本質的には資本制的分業に基づき幻想共同性による秘密な教授陣の擬似的普遍的意見の現実的基礎をここに求めらる。従つて我々にこつてはかかる「大学」「国家」という幻想的共同性を突破し、世界フロレリアード対世界ブルジョアジーといふ階級関係を意識において、運動主体におい

て追求してゆかねばならず、権力な政治内容運動組織・党組織はその下に統一的に包摂されねばならぬ。だが現実の個別斗争からくる具体的側面を媒介にして本質に迫まつていくという構造を我々は見逃してはならぬ。というのは五〇年代における戦後憲法理想としての民主主義・支配形態としての議院制・民主主義が現在全面的に再編されておき、国家防衛シヨナリスム、暴力機構の強化拡大、官僚の強化という問題を主要な支配理想・形態へと転換してゆくと、この問題の動向における我々の闘いなどよりいかに国家の階級的暴力的支配側面に引き込まれ、事を通じてリアルな私的進展を認識させる契機をつくりだし、大衆の意識に残存する民主主義的理想の現実との内的矛盾をより拡大し発展させるという意味においてどうなるのである。だからこの東大斗争は六・一五時計台占拠・秩父野山にまつて民主主義的理想そのものどつ肉在的矛盾を顕化させることを通じて、圧倒的に前進したのである。だから私は「民主主義コース」のブルジョア的コースへの回帰から「フロレリアード」をめぐり世界革新コースへの前進への出発点でしかならないことを我々は確認して置くべきであらう。

東大の支配形態は国六協路線に基づいてゐる。簡単に言へば、国立大学校長の協議会とひと教授会を通じて文部省の支配政策を言行するのだから、それは国大協・教授会の自治として一クッションをおき直接的な文部省の介入という形式を媒介しない自主規制であるかゆ之に、未だに学生が大学に於ける民主主義的幻想を自治の砦として確信してゐる段階にあることは、教授会の形式民主主義によつて支配されてゐることに彼は気付かない。だが教授会自身も、彼ら（学生・教授）の共同幻想たる大学を、別の共同幻想である国家としてその具体的側面の一つである運動隊の尊厳に国家権力の爪入をすることにやうやくしつてゆくことを通じて、学生が教授会という階級で斗争は進展し、「自治を申し」という内容で表現されるが、実は彼のとつていた大学という共同幻想が国家という共同幻想との対立矛盾として内的矛盾を顕化してゐる。

「二」で 東大個別口家資本に対する政治権力の介入を通じて帝国主義的再編の奥態が、口家の現象条件が与えらる。だがそれは自然発生性であり、目的意識性の萌芽とかかかった。問題は彼の内的矛盾である私的商品所有者としてのエゴと教育上研究という解放をめざした手段との形成する矛盾が大学一口家という共同幻想に於ける矛盾へと進展しながらも、その共同幻想の絆をのり越えられないという限界を如何に我々が突破できるのかという問題である。それはオニその意味を政治内容に明らかにするのであり、第二にこれを保障するイデオロギー斗争の意義を確認することであり、オニイデオロギー斗争を保障し、運動を進展させ、諸階層を統合し、全人民的政治斗争をすすむ戦術の問題である。

オニの問題は前に述べた以外に、形成された矛盾がより大きな幻想（例之は大学内学生のような）を集約せんとする、即ち階級関係の進展がもたらす新たなブルジョア支配政策に全面対決するものでなければならぬ。これは現在、学生参加とかく大学内大権威との対峙はれているものに対する闘いとして級別化を求められている。

オニの構造は権力による細目状から二カワホの支配に対し不断に対決しつつける意義を確認する事であり、法によって或いは慣習・道徳その他マスコミによるブルジョアイデオロギーの宣伝・支配を員板さとの欺瞞と非論理性をあはさし貫してブルジョア独裁へ専ら支配主義の宣伝・煽動を要求されていることである。これは決定的に不足していたといわねばならぬ。封鎖、斗争の位置づけの弱さを指摘している。

「三」の問題は、①そのような支配主義意識をたゞで運動として表現することであり、またライキ、封鎖は資本制分業の部分的マコを指すことについてブルジョア社会を現実的に否定してゆくものとして位置づけられるし、②封鎖を拡大してゆくことはいずれも諸階層との結合を追求し、③それは全国の学生斗争の結合あるいは政治斗争の立ちこめを通じて求むるべきものである。

以上 斗争戦術と政治過程の進展の山懸を主に意識の発展の問題としてとらえてきたか簡単に要約すると次のとおりになる。改良の果実を求めぬ大衆に対して提起される斗争戦術の発展による政治過程の進展は、オニには即ち意識の発展の問題としては、彼にたいしてより広く深いた対象に帝国主義世界をなすことによりて対象的認識活動の進展と、階級意識を形成させるのに不可欠であり、外的には帝国主義に対してより鋭く迫ってゆく能力斗争として評価しなればならぬ。それは統一戦線として組織的に表現されねばならないということである。

④東大斗争の政治的過程は諸戦術によって急進を進展を示していったが、本体的に分析している。六・一五時計台占拠は戦術隊導入斗争の具体化は次のことを示している。それまでの医才二大研究斗争はインターン斗争の市民的性格、オニ研究斗争の物取り斗争へのおかしみを経過しつつ医療の帝国主義的団結に対決する闘いとして指導されたが、個別階級の闘い、尚的指導の弱さは斗争の非和解性・処分の攻撃によって卒業生ホイコリト入試斗争で他階級の結合を求めつつも決定的発展をかちとれなかつた。すでに組織において普通性を志向しつつも現実において統一戦線としてそれは表現されねばならなかつたのであり六・一五時計台占拠はかかる方向を示している唯一の戦術であったのである。医才分大協に基づくブルジョアシートの支配政策の一環として行われ、かかる戦術は東大の象徴である時計台の機能をマコさせ、東大の学生の反抗を医才分大に注目をさせることを果たしては一切なしとなつたのである。作業の部分的マコによる国家の象徴的な干渉と制御、機動隊進入は学生の首長の「大勢の自己」という幻想的共同性と「国家」という幻想的共同性の矛盾と対立を形成し、共同性の枠を突破する契機を築くを与えた。かかる策光の時計台占拠なガラス決議を無視した共同ならびにシンパ組織で行われねばならなかつたことは当然であるし、オニの政治過程としてまた自明であった。

当時、一主体の力量をつけてかり「ワラ  
又次議を行つてかり」などといつた諸君は政  
治のリアリテテを知りなれない例は「革命の  
武装蜂起は国員養成してかり」などといつた空  
想的社会主義者の一種のよう(一)のみならず  
それはさつと根本的な困難、即ち当時の医斗  
争の個別階級運動としての限界を正しく認識  
し、統一戦線のひとつ意味を正しく理解できな  
い政治内容・戦術戦術・組織にかまつていな  
かつた。つまり日に帝の弱く東である階級性  
暴力性を理解しえないからにはけりならず、我  
々をのぞいたありゆる階級が世界一同一階  
級を担うことのできな(二)を示していた  
のだ。かかる諸君は「一併討台占拠は正しか  
つた」だとか「オニ次討討台占拠」の意義を  
ゆるがしく語り、「オニ次を革命は日知つた」  
などと折衷性を弄んとかもどろどろしているが  
オニ次占拠はむしろ階級なり階級でも否定はし  
ない。

だが我々にまつて斗争の国教化は新にな  
へんの出来事でもあつた。九月における病院  
封鎖の失敗と我々は正しく総括しなければな  
らぬ。それは医学科注の斗りな未だ病院内  
部のみならず医局・研究者の斗りへと至展し  
ており「一医者と患者」という聖域意識の愈  
々・討討台占拠を総括した病院内部の民衆の  
反響の強さをうちうちうたげた主体の力量が  
形成されていふなり、もちろん、このこと  
自体も、多様な運動の段階が、威力加入に  
対する階級の団結という形での増進ストリク  
への抜かりの過程にあつたこと、主体的には  
われわれを始めとする左翼が反帝統一戦線を  
もつての年連保への隊列を統合しはじめの  
は、10月以降であつたことに限界つけられて  
はいた。そして十月段階における各府院院封  
鎖・各府院封鎖の過程で動揺した左翼は諸階  
級を組織的に結束させ、不許のナルコイ  
テロや「一」の斗りを行つていくことであつた。  
たのむが我々はかかる任務をブルジョアイ  
テロや「一」の斗りを行つていくことであつた。  
たのむが我々はかかる任務をブルジョアイ  
テロや「一」の斗りを行つていくことであつた。  
たのむが我々はかかる任務をブルジョアイ  
テロや「一」の斗りを行つていくことであつた。

しよと反共斗にありて一時的にハテモ二一を  
低下させたのであつた。だがそれは一・三  
に到る過程でハテモ二一を提出し右翼白  
共をほしめ一切の諸事統との党派斗争にうち  
かつ過程で部分的に克服されてつた。ハテ  
スロ・カソとの結局をけめる中で預任医闘部  
では若手研・精神科・基礎・病院連合実行委  
病院研の斗りな前進し、四一・四二・  
四三各書医連による単一書連連成の展望を  
うちだし、病院封鎖に一步二歩近づいており、  
医局解体・近代化反対・教授会解体めとして  
斗争は発展してつる。現在我々は指導してつ  
る医局解体は、東大共同社会における資本制  
的な労働形成する医局共同性意識、外に對  
しては排外主義として形成されるこの資本制  
的な価値判断を、医局のマジという物質的諸  
關係の対決を通過して普及につらつた、かかる  
価値判断と高めつていくものであり、かかる  
個別階級意識人対決し東大の人民大階級人  
民共同管理をめやす内々の指導が中央権力  
斗争を準備するものである。

以上我々が確認してきき事は、我々の政治  
主張を大變に与えてゆくには學生大衆の持つ  
ていふ内的矛盾を變化させて展開させていくこ  
となくしてありえず、それなくしては結果  
として党外存在時にしか大衆にかかわれなく  
なるというものか、かかる綱索からのみ我々  
は諸階級を危置つてはくとしたなら個別斗  
争主義におちいつてしまつて危途がある。なほ  
なり我々の政治の主張は階級階級斗争を世界  
世界革命へ向けての現在の任務を提起してつ  
るのだから、そのような内容は個別東大斗争  
の架け橋からは決して与えきれぬからである。  
だから二一を全人民的政治斗争の持ち込みとい  
う戦術が提起されるのはなほなりだ。それは  
東大の斗りという種を突破して社会のあり  
ゆる階級階級階級人かかわれつていふ政治的政  
争を、一・三を全階級との特質的  
な反帝斗争へと発展させる。  
一・二・三国際反共斗争は東大斗争に大きな  
花障を与えてきた。七〇年争争粉砕というス  
ロ・カソは東大に持ち込まれ、七〇年争争に  
むけた東大斗争の役割を促進的堂々に意識で  
てはじめてのであつた。かかる布石が一・三

日大闘争の発展に伴い、全国学生闘争勝利一万人集会を結成させたの通り、我々は中央で斗争とエンスラ斗争の結合を追求したのと同じように、それはそれぞれの有様な戦術であった事が確認できる。だが全共斗内部で少教闘がしかなければならぬとして、全共斗として一〇・二一斗争をとりくめなかつた事によって我々の政治路線への結集が十分ならなくなつた事は一、二、全共斗封鎖の意義を人衆的に確認できなかつたそのとして結果しているが、それは組織戦術における総括として深化せねばならない。だからかかる一〇・二一斗争への参加はマツセンストと中央共斗斗争という共同体的意識をうちやぶる所からの指導を与之したのである。

党内反帝統一戦線、コンミュニスト的団結を、さて①で述べたコンミュニスト的団結とは如何にして組織的に表現されるのか明らかになりし。我々はクラス会、分組と左派の組織、クラススト、全共斗の再編を主張した。この組織、全共斗評は、その一切のブルジョア秩序、生産関係を否定し、プロレタリア統一戦線の一環に位置づけられなければならない。それは当面全共斗連一地区反戦の反帝統一戦線の中にくみこみ、その実体を形成するものでなければならぬ。そうであるがゆえに、学生のみならず、教授、講師、教授等あらゆる階層を結集するものとして位置づけられなければならないが、問題はこの新たな団結の組織的表現、全共斗評と自治会の関係である。我々は徹底的に「全共斗」に依拠し、その組織の持つ意味を明らかにしていき、左派の意見を統一を計っていくこと、そのオであると考え、階層の自治会、クラス、の枠にのみならず、諸君は右派であることを認識しなくしてはならないが、我々は活用できる限りにおいて自治会を活用すること、これはならないし、それはあくまで宣伝煽動の場であり、これを現在の段階では確認しなくてはならない。

如に注目しなければならぬ事は、かかる新たな団結形態を手にし、積美し、何れ学生、院生の自己能力ができた事のみ問題にし、大衆の自立が党派をのりこえ、事を党派性

にして、諸君である。かかる団結は、その部分の局地的であり、生産場での結合を追求し、世界革命戦争を準備する非合法的な主体として自らを形成していく任務を彼等が負わなければならない。東大コンミュニストは空軍庭園になつてしまつたに違ひなく、我々はかかる現行無政府主義を党的主体にまで高めていかねばならない。

### (C) 組織戦術上の総括

一、二、三、のまことに東大斗争の一大求戦は何を示したか。二、全共斗封鎖は二つの意味をこめていた。オ一は東大斗争を教授対学生という個別性、共同性、突破し、日帝に許すする斗いへと発展させる筋節としてあつたこと。オ二は教授対学生という共同性内で解決しようとする暴力的に登場した、日帝の帝國的秩序の暴力的再編に連動した、日共との対決による一挙的解体の問題であり、両者は表裏一体をなしていた。しかし全共斗内部に東大斗争の個別性を強調することにより、政府、大共闘、マスコミ、一体となつたキャンペーンの中、日帝の登場は我々の路線貫徹をきりきり切りにした。しかし、まず確認すべきことは、全共斗連、日大共斗の登場は本質的に日共との対決となる東大斗争を組織戦術論、党の存在と指導を媒介して個別の枠を突破すること、運動論的に進められたものであり、毎分粉砕、日帝打倒で武装された在野同一反帝全共闘の登場は従来の学生斗争とは異なつた質的内容をもちつたのである。

しかしながら、それのみでは求定的に成果は不十分であり、我々はかかる状況の中で路線を貫徹できなかつた原因を軍事的な問題として総括するのみならず、それを規定した組織的な総括をしなければならぬ。何故なら、





# 全人民的団結の

## 主体的根拠

学自衛論の和策に向けたわれわれの主張は、提起された内容は全体として次の四点にまとめられる。①大学の帝国主義的再編と帝国主義の批判、イデオロギー闘争の意、②政治闘争と経済闘争の結合、改良の課題と過渡的スローガン、革命的敗北主義、③運動過程に於ける大衆の分断闘争戦術と階級形成、④新たな団結形態、統一戦線術である。

われわれはこれらの中で不十分であった点、未だ提起されていない問題とこの紙上で展開することにより、一応の整理をし、現任要求される学自衛論の具体的方針を提起したい。

### 東大闘争と全人民的政治闘争

①最初の問題は、個別経済闘争の全人民的政治闘争への飛躍、発展と語る場合の「全人民的政治闘争」の内容は如何なるものであつたかといふことである。これまで何度となく、経済主義、ワンデーカリスム、テロリズムの批判を通し、個別経済闘争が政治闘争へと統合されて行かなければならぬことを主張してきたし、あるいは「東大闘争は1/18・19安用講堂防衛」を斗争を媒介にして、明らかに全人民的政治闘争に発展したと語られてきたのだが、この理解については極めてあいまいであり、まうまちである。といふのは、機動隊の序内導入を以つて、国家権力の学自への直接介入に対する真向からの対決をストリートに政治闘争に転ずることほできないし、ある程度闘争が非常に長期化し、暴力形態をとることをマスコミが大々的に報導

することによつて社会問題化して世間の注目を浴びることに対しては同様のことが言える。現象形態としてこうした状況を呈することがあつたとしても、全人民的闘争と表現するときのマルクスマールが足り得ない。問題は、学自内部に創られた権力状態、闘争主体の意識性、闘争形態等の頂のトータルな表現である。改良の課題は、直接的には特殊階級の特殊利害を追求していくものであるから、それが尖鋭化し、機動隊の導入がなされるにしても、その意識の延長上には、特殊利害の獲得を妨害する即自的反抗権力意識としてしか形成されない。ここでの闘争主体は、当局との関係の中での極めて狭い経済的領域にしか存在せず、その関係の中からしか物事を規ることができない。国家の暴力が飛動されることの必然性を全然理解できないだけである。国家と大学との関係がそれとも理解できないから、大学の自治を支配階級が制度的に保障した治外法権の如きものとして理解しており、排外主義として非には現われる。

### 如何なる個別経済斗争も全人民的政治斗争に発展する傾を内包しており、又発展させねばならない。そのことは資本制社会の有機的連関を造り資本制分業生産に物質的基盤を置く

く「相互に依存した社会」の故である。諸個人は社会的分業生産がもたらす社会的な結合に窮極的には依存せねばならないのだが、にも拘わらず、支配階級が生産手段の所有を通じて社会的分業生産の集合力を占取しているから、国家の共同性は「幻想の上」でだけのものであり、支配階級にとつてのみ特殊に共同的なものである。国家は「支配階級に属する諸個人がこれらの共通の利害を実現し、その時代の市民社会の全体が包摂された形態」であるのだ。従つて市民社会内部に於ける諸領域でのストリーバリード戦は、資本制分業生産の一時的麻痺物質的交差の部分の切断を意味し、資本制生産を占有する支配階級に打撃を与えるから、生産と交通を回復するために、その共同体的幻想性の維持のために、国家が全面的に登場せねばならない。日大、東大、中大を頂点にした学自斗争は、学自力商品生産の一時的ストップ、諸個人資

本の委託研究やそれとの連絡関係の停止、独占更には学内諸階層を統制する競争秩序、支配階層の麻痺として、ともかく大学の諸機能も混乱させ停止させた。課題は様々にあるにしても、その課題そのものはブルジョア社会の物質的諸関係の一種成部分に属して、いかにわけだから、課題の深化は、当然にも資本制分業生産、貨幣労働、資本、の極めて規定的要因そのものにメスをふるわざるを得ない。日大斗争は、6月7月段階でストライキ突入、9月における共闘隊との攻取戦の過程で、こうした意識性を獲得され、なにか、たにしても、全学バリケード、街頭バリケードという形態に於いては、別斗争の枠を越えていた。大学の機能はほとんど完全に失われ、めまいたであろう。その段階で「大学とは何か」を全体的に向う契機を形成したし、そのこととは「資本制社会における大学の向題を向い、資本制社会そのものを如何に捉えるか」という向題である。た東大における6/15安田講堂占拠斗争以降の過程もそうである。これにプロレタリアヘゲモニーの根を下ろしていくのは党の任務である。

ところが、学生↓院生↓研究者↓職員という運動の量的拡大、それに伴うバリケードの拡大→強化は、東大斗争に見られる如く、大学が存在する前提条件である入試の中止という事態にまで至らせた。勿論、加藤は恫喝の意味でこれを暗黙にしていても、ブルジョアジーがこれに批判を加えつつこれを断行したのには、大学の根本的再編を志向したからである。彼らは、これまでのように支配するところが不可能になったのに対して、新たな政策的展開を余儀なくされている。大学院大学、目的大学への再編として現行的に提起してあり、警視庁通達の内容の恒常化、大学諸機構の再編と学内運動への法的拘束として支配強化を進めるだろう。まさに中大評議会が「常置委員会」として提起したものが、その内容を表現しているだろう。

18. 19日内目的安田解放講堂防衛斗争は、大学の諸機構の停止、資本制分業生産の一時的麻痺、ブルジョア権力打倒を目指す戦力の学内弾圧と70年安保斗争の強化、「大

学とは何か」の論議の全人民への拡大、ブルジョアジーの大学政策の根本的再編の必要性、革命的左翼の総結集とブルジョアジーとの世界戦略をかけた攻取戦として、媒介項としての自衛要求であったにもかかわらず、それを部分に含みこんだ支配階級に対する被支配階級の政治的解放を獲得するための闘いであった。本郷―神田の結合した闘い、広範な大衆を巻き込んだマッセントの萌芽を形成した。向題は、別東大斗争が全人民政治斗争に質的に発展したにも拘わらず、革命的左派がそれを領導する力量を現的に持ちえていないことである。

### 中央権力闘争とマッセントライキ

われわれは、プロレタリア日本革命の型を中央権力斗争―マッセントライキとして指定した。ロシア革命の時もそうであったように、社会は圧倒的に形組を掌握してあり、ゼネストの指導体制を有している。彼らが実施するゼネストは、支配階級が既存の支配秩序を越え、階級の本質を露わにした。既存の体制の擁護―維持というものがなく、極めて防衛的である。従って革命的左派は、現実地域の設定とその組織的掌握を媒介にしたマッセントを打つことを目指せば、十分な闘い。革命的情勢にあり、政治斗争と経済斗争は結合するのだが、まさに経済斗争の激発という条件に媒介され、プロレタリア革命に向けたストライキ戦を地域的に展開する。まさにマッセントライキをバリケード戦として闘い抜くことができるといふことである。一方における陣地戦と、他方街頭政治行動―機動戦の結合を戦略として指定したものが中央権力斗争―マッセントライキである。本郷―神田の18.19日の闘いにも高まった東大斗争の発展を東大斗争それ自体の時間的経緯をたどるのみではなく、測ることは不可能である。早大―明大―中大―東大と展開された学内斗争がそれ自体の内的論理を有したり、それ自体の発展としてあるのではないのと同じである。明らかに階級斗争の全体的発展の内に学内斗争のそれを見なければならぬ。階級斗争の質の測定は、被支配

階級のあらゆる要求を内包し、普遍的利  
益を表現する政治斗争の中に現るべきが、ま  
る。革命党派の組織力、理論内容、大衆斗争  
の力量は、政治斗争の中に凝縮的に表現され  
るし、東大、日本斗争を評価する場合、われ  
われはとりわけ10・21斗争との関係として向  
題を設定しなければならぬ。プロレタリア  
階級主義の復活は、対外膨張し全社会的再編の  
中で動揺と分解を繰り返す大衆を底範に養ま  
らぬ、安床粉砕―日帝打倒という方向性のみ  
いて結合させ、国家権力の暴力を各地で寸断  
し、防衛―新階級―御堂筋を一時的にではあ  
るが制圧した。東大、日本からは当局学生と  
いう関係の圏外に在り、国家と全階級―層の  
関係に自らを置き多数の学生が参加した。ま  
さに10・21斗争が表現した質は、その後学生  
斗争の中に斗争勝利のための統一集会の実現  
を学生斗争を統合する共斗会結成の動きに  
みられるごとく、今やどのようが学生斗争も  
個別学問の枠を越え広範囲で闘われている。そ  
の意味で10・21斗争と東大斗争（とりわけ18  
―19の斗い）は中央権力斗争―マッセンスト  
ライクの原型を基本的に形成して来たとす  
。われわれは、本郷―神田に見られた斗いを  
全国各地に拡大し、そこにプロレタリアート  
へゲモニーを形成し、いかねばならぬ。

**革マル派の個別斗争論の破産の根拠**

い、この中で革マルは言う。「個別斗争には  
個別斗争の論理がある。個別斗争には異なる  
べき個別斗争の内面的な発展の過程の追求―  
組織的組織化として、運動の組織化との区別  
と階級主義にとらえかえられなければならない  
。10・21斗争（ニハ号）或いはもつと書いた  
革命的プロレタリアートの我々が大衆運動  
を展開するのには、大衆運動のプロレタリアを  
主導し、組織的に結集するためにこそするの  
である。10・21斗争（ニハ号）といふ具  
合である。

斗争戦術の左傾化 暴力化が即目的プロレ  
タリアへの革命的プロレタリアへの形成の過程  
と一致するものではない。とは自明である。  
だから、大衆運動の内面的な発展過程とは相  
対的に独自のものとして、即目的プロレタリア

アハの形成を對象化すること、つまりわれ  
を組織戦術として斗争戦術との区別と関連の  
下に位置づけざるべきこと、これも一般的には  
決して誤りではない。革マル組織戦術主義の  
誤りは、彼らが組織戦術は党形成、階級形成  
階級意識の形成とみえかえらるる。だが、階級斗争の内面的な発展とは党  
の形成拡大にのみみえかえらるるべきもの  
ではない。いわんや階級意識形成に矮小化さ  
れてはならない。階級形成とはこれまでの一  
切の世界史の人格的反映、歴史の具現物とし  
てのプロレタリアの自己對象化、すなわち現  
実的普遍性としての彼らが自己史の歴史、論  
理的構造を認識し、そのことによりて全世界  
をインテロロキト的に獲得し、大きくことを媒介  
として、現実の市民社会の深部にそのよう  
な自己の存在をプロレタリアへゲモニーとし  
て確立していくことを意味する。階級形  
成はもたざるべき共産社会の萌芽としての革命  
的プロレタリアの陣地の形成である。このこ  
とは直線的に党の形成に接するべきではない  
。このように革命的プロレタリアは、  
社会的組織的形態ソビエトの確立との関連は  
相違の下にとらえかえられなければならない。すな  
わち即目的プロレタリアの自己對象化は物質  
化された内容として、プロレタリアへゲモニ  
ーとして表現されなければならないのである。こ  
のプロレタリアへゲモニー論を受諾すれば、す  
なわ、党の孤立発展の一面的に追求する革マ  
ル派は、それ故全くのセクト主義、歪められ  
た前衛主義にいつても転落する。

東大斗争は一月段階における対日共とのゲ  
バルトの放棄、毎週講堂の放棄、  
証左である。それは彼らが党の形成発展をプ  
ロレタリア権力論との関係でとらえられない  
からに他ならない。すなわち現在の個別斗争  
で来たるべき権力斗争を担い得る斗争主体を  
作り上げていくということには、党の形成の真  
実な発展と、市民社会内部での革命的プロレ  
タリアのへゲモニー形成の確立に他ならない  
。それはプロレタリア政治革命が社会革命の  
質を内包したものととらえかえられないべ  
き必然性をもつていふからである。  
政治革命は社会革命の連関構造に因りては  
前提的に次のことが踏まえられなければならない。

プロレタリア政治権力が何故プロレタリア

の生産管理プロレタリアによる物質的生産手段の占有を物質的基として成立し、行われなければならないかというならば、そのようならば、独自体が過渡期社会から共産主義の低い段階への過程における否定的媒介としての存在し、しかもそれは共産主義の段階における国家の止揚階級の廢絶とともに消え去るべき運命をもっているからである。すなわちプロレタリアによる政治権力の奪取は、直ちにそのような政治権力の止揚に向かわねばならず、それは価値法則の廢棄として表現されるのであるから政治革命そのものが社会革命の萌芽として存在するのである。

だがその場合にも、最も支配的の意識は最も支配的の物質的諸関係の概念的表現であり、物質的生産手段も所有する人間が精神的生産手段もた所有するに限りにおいて、あらゆる革命はそのような物質的止揚手段の所有のためのプロレタリアの生産管理レベルに政治権力の打倒として、すなわち政治革命としてまず表現されるということである。それ故政治革命が社会革命の負を内包したものとしてみなすということは、政治革命が社会革命に先行するということとは、まさにこの区別と関連のもとにとらえられねばならない。

われわれの革命戦略は、現代過渡期世界における世界一回同時革命とその戦略論上の骨子とする暴力革命主義の立場なのであるが、その言われは「革命」の概念は単なる政治権力の移行にとどめられるべきでなく、その移行を具体的に担うプロレタリアヘゲモニーの確立をも含めたものとして指定されなければならない。その場合、前記した革マル的傾向の裏返しとして、革命的プロレタリアの世界戦略を大衆の自立なるもの（実際には大衆には価値判断はあっても自立などあるはずがない。大衆は社会的諸関係の総体として自己的物質的諸関係に直接的に規定された意識を自己の価値判断資本制生産判断として持つているだけである）と無媒介にくっつけようとするような試み（青解的自立論）は現在の情勢における大衆の組織化の困難性にかみつた大衆の自然発生性への拜跪の一形態に他

ならない。

我々の立場から言えば、革命的プロレタリアアレーの我々が主体であり、大衆は我々にとり変革の対象として客体として指定されねばならず、かかる我々をとりまく対象の変革が同時に自己の変革プロレタリア解放の過程として、すなわち人間解放の過程としてあるのである。そしてこの対象の変革には、新たな物質的諸関係の構築が指定されて、そのあり、その新たな物質的諸関係が市民社会深部へのプロレタリアヘゲモニーの形成として、すなわちプロレタリアのプロレタリアトへの形成としてその物質化された団結形態の確立としてとらえなければならない。結局それはソビエトとして表現される。そしてそのソビエトは過渡期社会から社会主義社会への発展を社会的生産過程の一環として担うものであり、ここで直接的生産過程は権力実体そのもの、一環なのである。

だから革マル派が東大斗争の後退的局面の中で、そのような否定的現実に踏まえつつ、それを切り拓く方針を提起することなく、彼らの中央委において、早く敗北宣言を用意し「これからは組織戦」と言明し「これは、彼らの別斗争論なるもの、そして実は組織論そのもの、破産の結末である。彼らは、(A)階級の形成を意識の形成としてのみとらえ(B)それ故そのような階級の形成は、実は党の同心円的拡大へおしとめられ、(C)その結果社会革命の負を内包した政治革命を実現するためのプロレタリアヘゲモニー論としてのソカイエト論が全く欠落している。(D)従って、党が国家にとってかわるといつ、まさに即自的反スタ論者にならねばならない反スタ・スターリニスト革命論なのである。

政治斗争に向うコミニエンの団結の形成

(一)東大、日大、中大斗争を頂点にした全国学生斗争はいま、東大一月斗争を経て、いよいよ、とりわけ関西全域、東京周辺の諸大学にその負を受け継ぎ広がりつつある。ブルジョア階級は当然にも、新たな大層政策を相想している。我々はそれに対して、我々の大層政策として制度的に保障される形で、イメ

一、これを提出し、それを實現する形を学闘  
手を今後展開することだけ譲りであると考え  
る。何故なら、(ハ)が明らかになるべく、フ  
レシコアジの生産手段を占有している限り  
に於いて、地帯的諸関係は資本制生産関係と  
して存在して行くのであり、プロレタリア  
トが自らを支配階級にまで高めたい限りにお  
いて社会革命は遂行されなければならないであ  
る。まさに大層なものか現在の存在形態と  
異なる形に変革されて行くためには、プロレ  
タリアートの生産力における生産管理と政治  
権力の奪取という道を経なければならぬ。  
社会革命は政治革命以前に實現されない。大  
から学闘手はそれ自身の終焉はもたないの  
であり、常に権力斗争へと統合される方向性  
を帯びなければならぬ。實在的な社会的諸  
関係の二手は協議に拘り不断に組織すること  
これはプロレタリアヘゲモニーの形成とマ  
プロレタリアートの政治権力奪取の日まであ  
らゆる手は敗北し続けるのであり、学闘手  
争も又資本制生産そのもの、廢棄を最終的課  
題とする。フルジョアジとの間に取り交わ  
す諸機軸と諸制度の法的實現があり得るとし  
ても、ブルジョアジの一時的後退でしかな  
く、むしろ生産手段を彼らに所有してある限  
りに於いて基本的には支配秩序の再編とマ  
把握すべきである。我々が学闘手に形成する  
のはコミニコーンの固結である、その内容  
はプロレタリアヘゲモニーであり、その形態  
は先程展開したところの内容である。

我々は東大斗争の過程で個別斗争の形成  
という革マル式理論が完全に破産し、空中分  
解したのを確認したのだが、史上三度目の帝  
国主義の市場再分割戦の前始から今日にお  
ける学闘手論、即ち帝國主義の対外膨  
張のための国内社会的分業の再編、支配秩序  
の再編の一環としての大層の帝主義的再編  
論の再編の再編としての大層の帝主義的再編  
論の再編の再編である教育界斗争論の和菓を、  
その徹底したラジカルな実践と更に追求しな  
ければならぬ。

### 全同学員共闘ソビエト運動

一月八、九日の本郷、神田の斗争の特徴は  
東大斗争が一層目の秤を越えて全人民的政治  
斗争へと急ヤク、発展した点である。二三  
月段階における全同学員斗争は、まさにこの  
頂をもつて斗争がけられねばならず、これなし  
に諸学員斗争の現局面を突破、発展させるこ  
とはできない。

学闘斗争を展開する如何なる大層におりま  
も、今入試闘争を焦點として大層の運動を開  
始して再び、当局の機軸導入、万葉体育会  
を利用してバリエード破壊という動きが東大  
斗争以降目下、明洋大、芝工大等に見られ  
る。学闘大での機軸隊が防衛する中に入試が進行  
され更に全面解除を強行した。

東大斗争が全人民的政治斗争へ発展した時  
点までもう一つ明らかになったことは、個別  
斗争が全人民的政治斗争に発展するや否や、  
その全人民的政治斗争を領導する力量と革  
命的左派は現在の持ち得ていないこと、つミ  
とである。にも拘わらず課せられた任務は  
極めて膨大であるから、力量が足りないとい  
うことを理由に課せを棄り去るのであれば、  
課題に充てる方向を持つて絶えず実践的にそ  
の任務を遂行していかねばならぬ。

### 東大攻防の深化とそのソブル的反映

「東大確認書」は、東大斗争が七項自要求  
の改良的課題の殻を打ち破り革命的な方向に發  
展していく過程で、当局の「譲歩」は、大衆の  
分解と中道右派の形跡、日共リ民青の反革命  
的登場という図象の中で成立した小ブル的性  
格を持つ取り決めであった。これはブルジョ  
アジーが物質的生産手段を所有するがために  
その物質的諸関係を前提としてあり、精神的  
生産手段をも又ブルジョアジーが所有する  
るがために、大衆は自然發生的に回復を  
越えないことも同様証明して来た。従って  
大層共同体的幻想への回帰としてある。  
従って「東大確認書」はそれ自体「一片の

新印れしに過ぎないものがあり、馬に御乗  
意味で階級斗争の武器にたどり得られ、に  
己拘ら下ブルジョアジーは「秩序回復」に役  
立った。これをなせ目的の依にするのか？それは  
帝の主義者が対外膨張を開始した今日、政治  
と経済との相違のズレを懸念して「残存させ  
て、」という意味に於いて（言ひ換えれば、  
市民社会末端に至るまでの統治を支配階級が  
行い、ブルジョアには、その阻害要因として「確

（C）こうした基本見解の遂行に当たって、皇  
家権力の暴力装置を物質的背景として、全面  
的運動に打ち出す弾圧体制の強化の意志表明  
を行い、大学当局にこれを受け容れることを  
要請している。

象とし、現象し、ところの力関係、すなわち  
伯別勢力の秤を越えんとする東大斗争の因縁  
が厚住するといつ意味に於いて、支配階級が  
ブルジョアを切り取るのめがけ、これを契機に  
「民主主義を含む全面的な東大のレフト・パ  
ーティ」を築くべき対象として、だからであ

（このらに於いて、現在、自民、文部省、警  
察庁が一体となり、攻撃している、いわゆる  
「京大、立命館方式」の自主封鎖解除「自民  
団」、「正当防衛権」、「反トラ武装」への  
恫喝なども、先に述べた支配階級の大層再編  
との関係ではじめて理解できる。

「民主主義を含む全面的な東大のレフト・パ  
ーティ」を築くべき対象として、だからであ  
る。この「確認書」に対する文部省の基本見解  
は、以下の如くである。

「このらに於いて、現在、自民、文部省、警  
察庁が一体となり、攻撃している、いわゆる  
「京大、立命館方式」の自主封鎖解除「自民  
団」、「正当防衛権」、「反トラ武装」への  
恫喝なども、先に述べた支配階級の大層再編  
との関係ではじめて理解できる。

「民主主義を含む全面的な東大のレフト・パ  
ーティ」を築くべき対象として、だからであ  
る。この「確認書」に対する文部省の基本見解  
は、以下の如くである。

「このらに於いて、現在、自民、文部省、警  
察庁が一体となり、攻撃している、いわゆる  
「京大、立命館方式」の自主封鎖解除「自民  
団」、「正当防衛権」、「反トラ武装」への  
恫喝なども、先に述べた支配階級の大層再編  
との関係ではじめて理解できる。

### 宇田・神田戦以後の学闘斗争の発展

（B）「大学の基本に関わり、他の大学に大  
きく影響を及ぼすような内容を含まない、大ま  
く何事か」として、学闘斗争の拡大、深化、  
他勢力への転化に恐怖している。河魁に「大  
層再編される学生自治活動の性格、形態、さら  
に「東大ハンフル」の廃棄、「団交権」承認、

伯別斗争が普遍的質をもつて来り、時、  
支配階級は、それを伯別の領域に押し止め、  
諸伯別斗争の結合を分断し、伯別撃破をなし  
まくくが常とう手段がある。多くの組織が  
まとまった一つの太い流れに統合された時、  
それは巨大な力を発揮するからである。

「大学の基本に関わり、他の大学に大  
きく影響を及ぼすような内容を含まない、大ま  
く何事か」として、学闘斗争の拡大、深化、  
他勢力への転化に恐怖している。河魁に「大  
層再編される学生自治活動の性格、形態、さら  
に「東大ハンフル」の廃棄、「団交権」承認、

伯別斗争が普遍的質をもつて来り、時、  
支配階級は、それを伯別の領域に押し止め、  
諸伯別斗争の結合を分断し、伯別撃破をなし  
まくくが常とう手段がある。多くの組織が  
まとまった一つの太い流れに統合された時、  
それは巨大な力を発揮するからである。

「大学の基本に関わり、他の大学に大  
きく影響を及ぼすような内容を含まない、大ま  
く何事か」として、学闘斗争の拡大、深化、  
他勢力への転化に恐怖している。河魁に「大  
層再編される学生自治活動の性格、形態、さら  
に「東大ハンフル」の廃棄、「団交権」承認、

質の結集軸を獲得してあらず、三つ目には

個別改良斗争の物質化された団結形態として  
の「全共斗」が分解を余儀なくされてあり、  
階級斗争の現在の総局面に對して新らた  
の団結形態が要請されてゐること、そして最  
右に何よりも、われわれ革命的左翼が戦斗的  
大衆を組織化していくことの組織配置を全  
戦線に定着させていくことがなされないと  
組織的脆弱性として、権力の圧倒的暴力と  
イデオロギー攻勢の前にわれわれの後退を余  
儀なくされた。街頭行動そのものを権力は全  
面的に規制してゐる。本郷は必要あらば直ち  
に押動隊を配置するという反革命の若化し  
てゐる。

こうして中でブルジョアジーは、昨夏夏以  
来全日学闘斗争の拠点として位置して来た日  
大斗争に對し、全面的に撃破を、東大の次に  
宣言してきてゐる。日大当局も、入試を前に  
して押動隊の出動要請を正式に出してゐる。  
中大も同様に向島が提議されてゐる。東大  
日大、中大の三拠点を、東大斗争への弾圧を  
突破口に分断をおもひ遣ひ、一挙的に壊滅させ

まくといふのが彼らの腹である。東大斗争  
はブルジョアジーの世界戦略と全共の革命党  
派の世界戦略をかけた階級尖端にみける攻勢  
戦として展開され、東大の枠を突破して、日  
大、この日の東大斗争は支配階級と被支配階級  
の斗いの場次的表現である。だがブルジ  
ヨアジーはあくまで東大の中に向島を解消せ  
んとしてゐる。

われわれは日大斗争も、中大斗争も合んた  
形で、一八・一九日の斗いを展開して、日大  
。従つて、現局面はその地甲上にあるとすべ  
ば、如何なる学闘斗争もブルジョアジーと革  
命階級との斗いとして展開されなければなら  
ない。日大斗争はそのようなものとして、  
提起されてゐる。だが一八・一九日以降のわれ  
われの総体としての力の後退は、日大斗争を  
その両日と同様の質と形態において斗い抜け  
ない。我々ももつてゐる。弾圧の内容は、階級  
斗争総体に對するものであるが、その記録  
形態は個別撃破である。そうすることによつ  
て、学闘斗争をともかく分断して壊滅させま  
いくといふことである。

日大再占拠—入試阻止へ階級的団結

日大斗争は、東大斗争と異なり、9・30大  
衆国交で民主主义的要求を古田に「吞ませ」  
て、一時的に裏切られた。右、権力との全面対決  
を意識化させた。以降、学内内の団結は解体  
の一途を進み、むしろカルデエ・ラタン斗争  
の拠点としての位置を保持した形にあり、全  
厚バリエードストの堅持、他大厚の支援等々  
して階級的団結形態を求め、運動は展開さ  
れてきた。だが秋を通じ、日大全斗争運動の  
階級的団結形態遠衣を萌芽的にはらんだ斗い  
の自然成長に對して革命的左翼の反帝統一戦  
線形態をもつてする、目的意識的指導がある  
うにも立ち遅れたがために先進的層に於ける  
意識の転換をからとれず、最も先端からの少  
なからぬ脱落を許してあり、それが斗いの裾  
野の狭大さにもかかわらず、団結を弱め、ち  
田の屈直りを許し、当局の自己分裂を緩和し  
、学内の「政治態度」もかくしてまた最大の  
原因である。

自然発生的憤激の直接的表現としての暴力—  
は、学生運動史上稀に見る強大なものを生み  
出したが、その暴力をイデオロギー的に支え  
る内容こそレーニン国家論的把握（国家は暴  
力）でなければならず、組織された暴力として  
一々党的指導を媒介に再編されていかなければ  
ばなななかつた。全共斗そのものは、各厚部  
の連絡階級的性格のもので、しかも、極めて  
連合的であり、斗争初期ほどは、現在で  
はスケジューリングの一致をのみ獲得する程度  
のものである。しかも権力と古田は入試を前  
に分散し、孤立し始め、いよいよ斗争主体に對し  
押動隊導入の恫喝を背景に、右翼、職員を動  
員し、ほぼ全厚部にわたるバリエード解除を  
工作してゐる。

われわれに向われ、いふ課題は基本的に次  
の裏である。  
ヤーに、日大共同体が市民社会総体と  
の交通を入試という形態にあり、復活させ、  
かつ、それを契機として権力と右翼私兵によ  
る全日大人へのレ・パ攻撃、帝同主義的再編  
の實際的遂行を企て、いふのに對して市民社  
会との有機的交通の切断を歴史的に展開し、  
団結の拡大、深化をからとつて、いくものとし



二月十一日から始まる「入試阻止」を当面の最大の課題としていかねばならない。入試の一方の当事者である受験生とそれと共に家族の理想的共同体を形成する家族諸個人は自らの特殊の個別的利害に基づいて小ブル的意識とその非化に専らにより、市民社会秩序維持に入試実施を要求するに至る。他方ブルジョア階級は、市民社会秩序の社会的命脈秩序の一角を日大斗争が運動において突破しつつあることに対し、自らの幻想の普遍的利益ブルジョア階級の特権の維持の爲に乗り出すざるを得ない。即ちここにありて家族的幻想の共同性に基づいて即自的願望に大衆の個別利害が、国家による幻想的共同利害へイデオロギー的現実に統合されるのである。東大の入試阻止の債を継承し、日大にありても同様にこれを獲得せねばならぬ。

ヤニ、入試阻止斗争を基軸に大衆を結合させ、いかにこれを媒介にして、権力の手による解決を以てバリケードを再構築し、運動の拠点を確保すること、とりわけ運動の中核的拠点を占める法、総司令部の奪還をめぐる戦い、これらに、拠点を確保すること抜きにして運動の発展を願うことは文字通りの願望である。

ヤニ、当局は、各層部の矛盾折衝を設定し、大衆をスト收拾し入試実施の方向の下に収斂せんとする。これに対し、18日の教授会総決起に大衆を結集させ、理事者を引き出し、古田との対決を全面化させる進取を形成せねばならない。矛盾折衝は、当局の見解を一方的に、しかも各層部毎に分析して述べたものでなく、これ自体を分析して行かねばならない。これとは全く別の性格の階級的犯罪性を暴露し、われわれの要求をつきつけなければならない。

格をつきつけた。日大斗争にありても、ここに国家権力の激突、右派学生との度外斗争、大衆の分解、全共斗の分解が進行するであろうことを予見し、それに対抗して組織再編をなすべくいかねばならない。

同盟の各層部斗争の組織指導強化を通じ、大衆の帯日主義的再編論のヘゲモニーを相殺し、政治斗争へと向かう団結の負を獲得することである。これを通し、「全共斗」そのものをわか同盟の手によって再編し、ゆくゆくは、あらゆる諸階級には、これが不可能である。

われわれは先に提起した「全層部」の建設を全共斗にとつてかわるものとし、その下に目的意識的集団の武装行動隊を自然発生的に形成をこの組織形態を基に行っていく。

ヤニ、全日学同共斗の現在の進取を日大斗争に設定し、一月十八日、十九日、東大斗争に引き継ぎ、二月十一日を契機に全革命的左翼、全日学同共斗を闘うべきの部分を集結させ、全人民的課題として日大斗争を導き彫りにさせなければならない。

向題の設定を「入試粉砕、法経奪還、理事総退陣」に置き、コミュニケーションの団結を基に、権力との政治戦を展開せねばならない。

### 全日学同共斗とエト運動へ出発

日大斗争を魚眉の課題として、全日学同斗争が半やれまくわけであるが、現在関西、関西全域に渡り、大衆と全日学同斗争に統一的方向性を確定せねばならない。

京大、立命館、関西大の争いは、一挙に、バリケード戦に発展した。権力は、中核階級中「東大確認書」に対する基本見解をイデオロギー的軸として攻勢を展開している。同層大では、行動隊を配置、入試を強行し、更にバリケードの全面撤去を行った。日共一民青年は、当該大衆の即時的願望に依拠し、「入試実施」を唱い、反革命勢力として登場している。

われわれは日共一民青年の斗争の中に、これらの諸斗争を止め、権力、日共一民青年、右翼の手に曝させず、運動の発展を保障していくた

めに、「全日浮自斗争共闘会戦」の結成を急がなければならぬ。これは、われわれの統一戦術の如別選定の適用であり、中核M.L.、田中ロ、青野左派、社労同を対象とする。集一集合、統一行動、議会の系統的設定、統一戦術の設置、そして内部に於けるテオロギー斗争を保障する。各浮自に於けるヘゲモニー、とりわけ中大、京大の大众的基盤を媒介に、この「全日浮自斗争」のヘゲモニーをわが同盟が確保せねばならない。全馬の大半は今入試を控え、権力と斗争主体の攻防関係が激化し、広範な諸階級層の分解が進展しており、ここにわが同盟が全面的に登場せねばならない。

このよう内容をもつて形成されるべき「全日浮自斗争」は、安田北守、神田市街戦の斗争の組織的継承、発展としてある以上、「反帝統一戦線」と階級的階級運動との向題として提起されてきた、階級戦線における地区反戦、地域共斗運動との連関の下に、全浮連の斗争が、それを主導することを指しはありえない。

しかも、この組織形態は、帝因主義の侵略・抑圧、反革命に対する階級権力斗争ーマツセメントをめぐり斗争形態のうちに、全人民的政斗斗争の一環として別斗争がくみ込まれることも通じらぬ。地域別取場における資本の専制を打破すべし、レトリックへモニーを成し、組織の形骸化（単なる連絡枠の強化）を克服し、永続的発展をもつマ、ソビエトを追求し得るのである。

また、日大斗争に同じく前述した五つの斗争組織戦術の成否も、寧ろ、わが同盟が全人民的自立立場から、この全浮連「全日浮自斗争」を領導し、日大全共斗の革命的左派が、目的の第一として、この斗争の位置づけ、これと結合して斗争を進めるかどうかにかかっているのだ。

まさにそうであるから、当面は別別的に對峙していくとしても、三月下旬の全浮連大会の成功を背景に、遅くとも四月中旬にはこの結成を遂行させ、20年に向って、広範に市民社会内部から巻き起るエニルギーを母体斗争に合流、統合して、く組織の一歩をこえ、うーだりにおいて、なくである。

こうして「全日浮自斗争」の執果としてわが同盟指し下にある中核的位置としての中核合中斗は、当局の「常置者の撤廃、浮館運営」の保障」という譲歩を獲得したが、既存の大浮秩序の解体を要求する大衆は、依然全中斗に結集し、とりわけ入試問題を契機に民青との階級斗争の必然性を理解している。学生運動の執果としての中核は、まさに全日浮自斗争の執果として登場し、いかばならない位置にあり、入試阻止を突破口に、現在若干後退を開始しつつ、ある東大、日大を再統合していくであろう。

ともあれ、百大層にも及ぶであろう浮自斗争は一月十八、十九日を経て新しい旗を獲得し、つらあり、かつまた高い高度な階級斗争戦術を以つて20年毎斗争に向、つら。浮自斗争論相築に向けられわれの主張は、一応こころしく、るわけであるが、日大斗争に全力を集中し、中大斗争を圧倒的に飛躍させ、東大斗争を階級階級を契機に巻き返さし、全日浮自斗争の流れを最終的に発展させる形に、いマ「全日浮自斗争共闘会戦」の結成を準備し遂行する過程で、更なる理論的架橋を獲得し、つかねばならない。